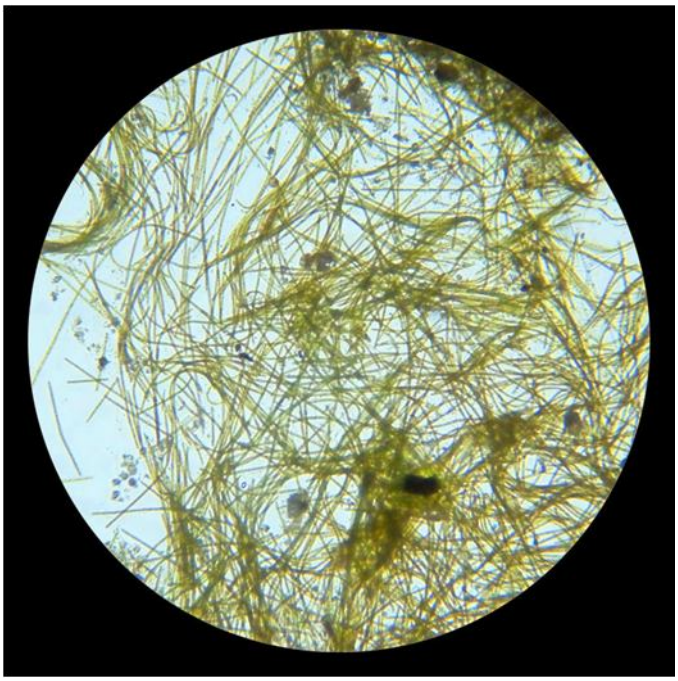
「日々の理科」（第 772 号） 2016（H28),-8,17

「三日月沼のミカヅキモ（２）」

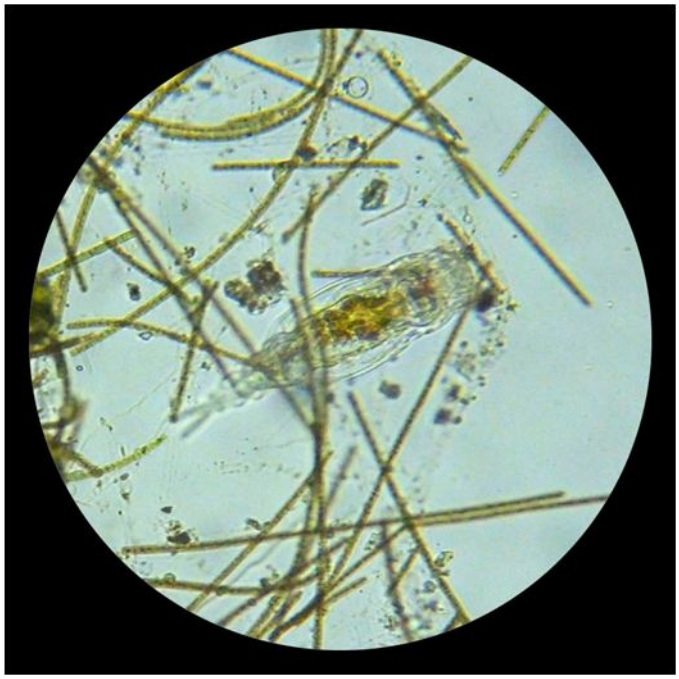
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

都幾川の河跡湖である三日月沼から、湖水のサンプルを採取してきた。500cc ペットボトルに一杯である。池での様子と同じように、ボトルの水面付近に緑色の藻のようなものが浮いている。池の水は緑色に淀んでいたので、私はペットボトルに入れても、青汁のように緑色に濁っていると思っていた。しかし、こうして透明な容器に入れて、背後から光を当ててみると、意外にも透き通っている。もちろん、飲む気にはなれない。これを全部飲んだら、数日後には死んでいるような気がする。

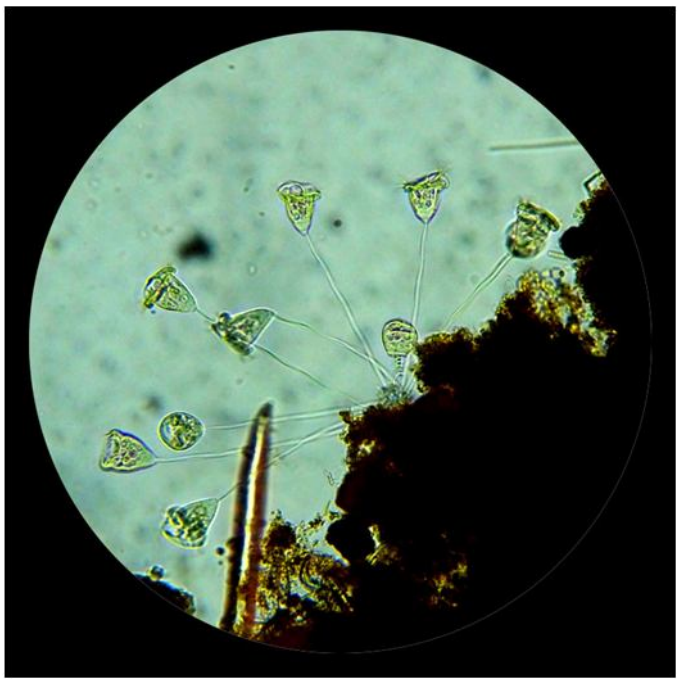
まずは、水面に浮いている、緑色の藻のかたまりを観察してみた。ピンセットでつまむと、ひとかたまりになって取り出すことができる。



正体は緑藻であった。アオミドロのようにも見えるが、やや色が褐色気味で、細胞も細い。恐らく近縁の異種であろう。



この緑藻のすき間には、おびただしい数の動物プランクトンが生息していた。写真はワムシの一種である。プランクトンに知能はないので、スライドとカバーグラスのすき間でも、構わず餌をあさり続けている。



ツリガネムシも多く見られた。ツリガネムシは池底や浮遊するゴミや甲殻類の抜け殻に、多数が着生していることが多い。よく観察すると、口の付近に水流（渦）を作って、水中の小さな餌をかき込んでいるのがわかる。おっと、探しているのはミカヅキモだった！